

森尻理恵歌集『虹の表紙』

生き方選び

「塔」所属の地球物理学研究職の著者の第三歌集。一人息子の確かな成長と、闘病生活の十一年間がリアルに読み手に迫ってくる。内容は重いが暗くはない。たんたんと事実を具体的に積み上げて、奥行きのある哀感のひびく集である。

わらわらとバスより降りる人の波がセンターに入りゆきたり

葉選びは生き方選びかとりあえず普通に仕事がしたいと言えり

体重と体温を毎日測れとぞ虹の表紙のノート渡さる
率直な医師の言葉に頷きし息子は部屋出て「重いな」と言う

近い先のことのみ考えゆく暮らしこれから始まる いつまでか知らず

三部構成の二部は一首目から始まる。「バス」の具体が効果的で「がん」の平かな表記も、端的な結句にも、歌に対する美意識があり、ストイックなまでの表現が心を打つ。一、三首目は生き方選びに連動しており、「重いな」の息子の一言に病の実状がわかる。五首目には先の見えない不安感が詰まっている。

病室のカーテンの「たまご色」は確かにと納得し、下の句への展開が穏やかでありつつ個人的だ。後者も「青年の失意のような錆色」に高い独自性があり、「青年の」が効いている。父の挽歌をはじめ、家族それぞれの歌も折折の様子を伝えている。なかなか亡き母の歌が胸をうつ。

天井の低き二階に臥す母は達磨の色紙を見つめていたり
母臥せる竹のベッドのきしむ音六十年経てなお耳にあり

「達磨の色紙」に時代性があり「ベッドのきしむ音」が切ない。こうした身めぐりを核にした集中、最も印象深かった「連が「青虫」である。著者の歌の師、神谷佳子「序」の言葉を借りると、「大きく言えば神羅万象にひそむ生命継続の志」を匂わせて、青虫の命も、著者を含めた人間も命あるものすべてが生きて輝いている。

右へ噛み前へ進んで左へと葉を食む青虫ひたすらに食む
後ろ身に力を入れてぬぬうっと前へせりだす青虫の歩は

梔子の若葉を離れぬ青虫を剥がせばくるりと弾む柔肌
補助輪のない自転車に乗れたよと幼子弾む青虫歩む

この星の気圏とう薄膜に覆われて棲む青虫われも
筒井早苗歌集「椿は咲きて」

人生と心情と思惟との一体化

「新月」代表として、二〇一八年末に終刊を果たした著者の第七歌集である。一九五四年「新月」入会より歌との長い歴史と深い思いが凝縮されている。著者自らの人生と心情と思惟と

「がんばった」は他人から言って貰うもの自分から出す言葉ではない

生きることすべてが修業と言われしと子の思春期に良き出会いはあり

「自分から出す言葉ではない」と言えるからこそ、「良き出会い」と捉えることができ、母と一人息子の心の繋がりがわかる。引きたい歌は数限りなくあるが二首を引く。

やわらかい風を選んでしゃぼん玉を冬の日差しの中へと送る

少しずつ眉毛とまつ毛の戻りきて見覚えのある顔となりゆく

川野並子歌集「緋い交ぜのみどり」

丁寧な眼差しの描写

「好日」入社十五年を区切りに、「好日賞」を含む、四百七十首を収める第一歌集。真如町に住む著者の日常は真如堂の四季と呼応した作品も多く、丁寧な描写は絵画のようだ。

真如堂境内東の小堂に千体地藏の座す薄ら闇
今年また藤袴咲く真如堂西の砂利道おなじところに

前者の「東の小堂」後者の「西の砂利道おなじところに」など、何でもない所だが、この具体的表現が歌の景を鮮明にしている。こうした表現力は色彩感覚にも通じているようだ。

卵色カーテンのなか検査待つたまごの殻に守られながら
夏去りて南天の実は青年の失意のような錆色をなす

が一体化し、老いの一人居の現場が鮮明に立ち上がる。

哀歌のおぼろおぼろと雨が降る現世前世のけぢめもなくにかき曇りゆらゆら低く黒揚羽呪文をまきて消えてゆきたり

日光に月光菩薩を脇侍とし薬師如来に老いはきまさず
いずれにも著者独自の感性と個性が光っている。「現世前世」

「呪文」なども言葉の持つ印象とは違い不思議な明るさがある。
人恋ふる心忘れて久しきよ人恋ふはよし山上の虹

生かされて加速してゆく一年の良きも悪しきもすでに茫茫
花のなき年もまたよしあぢさるの青葉ばかりが風をよびふる

五色椿いっさいの五色まなこに収めきて仄めく胸や夜ふけてなほ
生かされている認識は老いの故でなく、自己省察と自らの人生観死生観に通じている。自由自在に詠いながら、一首目や五色椿には瑞々しい艶やかさがあり、次の帯の歌にも通じている。

覚悟などあるもあらぬも天命の尽くる日は来む椿は咲きて
踏ん張るもこのあたりまで流れてきて風の随まにゆく小さき蝶
そして悲しいけれど記すべき事実がある。娘の挽歌である。

温もりの伝はりてくる頭蓋骨 壺に収むるふたひらみひら
生垣をくぐり抜けたる白き花生きたかりけむ生きたかりしよ

愛別離苦、生老病死は世の定めではあるけれど、逆縁の愛別離苦と病の悲苦は筆舌に尽くしがたい。「ふたひらみひら」「白き花」と厳しく抑え込んだ表現に深い悲しみが宿っている。